九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文法の回帰 : 2009年施行コレージュ新カリキュラムをめぐって

飯田, 伸二
鹿児島国際大学大学院国際文化研究科教授

https://doi.org/10.15017/16854

出版情報：Stella. 28, pp.67-78, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

文法の回帰

―― 2009年施行コレージュ新カリキュラムをめぐって ――

飯　田　伸　二

2009年の新学期より，フランスのコレージュでは全科目を対象に新カリキュラムが施行されている。現在の施行対象は第1学年に当たる第6学級のみである。以後毎年1学年ごとに施行対象学年が上がっていく。つまり，新カリキュラムが最終学年である第3学級で施行され，コレージュ全体をカバーするのは2012年の新学期である。また教科書については，年ごとに改訂版や新版を出版しながらカリキュラムの施行状況に対応する教科書会社が少なくない。こうした出版事情により，新カリキュラムに沿った教科書が出揃うのは早くとも2012年の春を待たねばなるまい。それゆえ新カリキュラムを論じるにはまだ時期尚早といえるかもしれない。しかしフランス語という科目については，早急に報告すべき興味深い変更点がある。筆者自身も新カリキュラムの基本的な方向性と，カリキュラム改訂の背景についてはすでに論じる機会をもった[1)]。

本稿の目的は，新カリキュラムがことばの学習をどのように捉えているのかという問題に着目し，その特色を浮き彫りにすることにある。周知のように，コレージュのフランス語教育はことばにかんする学習，読むこと，書くことの３つの大きな柱からなる。そしてコレージュにおけることばの教え方を大きく見直すことを目指して1996年から施行されてきた旧カリキュラムの理念は現場の教員に大きな動揺・不満を与えたばかりでなく，多くの文学・語学研究者，作家に強い拒否反応を引き起こした。じじつ，コレージュのカリキュラムがこれほど大きな批判にさらされたことはかつてなかった[2)]。旧カリキュラムに寄せられた批判に，新カリキュラムはどう応えているのだろうか。

１．文文法からディスクールへ

1996年と2009年のカリキュラムを比較して，まず指摘すべき事実は，こと

ばの学習が占める位置が大きく変化した点である。詳細は後述するように，旧カリキュラムにおけることばの学習の扱い方には，ある種の曖昧さが払拭できない。他方，新カリキュラムはことばの学習に際立った重要性を与えている。おそらくこの点が両カリキュラムを隔てる最も重大な差異であり，両者の構成の違いもここから派生していると考えられる。

旧カリキュラムを特徴づける基本的な姿勢は，「生徒の視点」からことばを捉えることであった[3)]。この視点の導入は，コレージュにおけるフランス語教育のあり方を根本的に見直すことを含意する。旧カリキュラムに付された教員用指導書の立場に立てば，コレージュの生徒は文法を熟知してはいないものの，日々フランス語を運用し，他者とのコミュニケーションを成立させている。それゆえ，文法のためにことばを学ぶこと，とりわけコミュニケーションの現実を捨象した文文法を中心にことばを学ぶことは，旧カリキュラム以前ほどの重要性はないことになる。

つまり「生徒の視点」からことばを捉えるとは，具体的にはコミュニケーションの観点に立ってことばの学習を再編することに他ならない。そこで，さまざまな学習活動をつなぎ合わせ，コミュニケーションの見地からそれらを一つの全体にまとめるべく導入されたのが「ディスクール」という概念である――

> 従来のカリキュラムは３つの柱によって成り立ってきた。すなわち，ことばの習熟，教養の育成，学習方法の獲得である。これらの賭金は新カリキュラムでも失われてはいない。だが，これらはより具体的で精確な学習対象に統合される。その対象とはディスクールの習熟である。ディスクールとは，筆記あるいは口頭でのコミュニケーション行為におけることばの使用全般を意味する。
>
> ディスクールという概念により，学習のさまざまな形式と内容を結びつけることが可能となる。この概念はことばにかんする学習活動をテクストと読み・書きの実践に結びつける。こうしてディスクールは進度に確固とした形を与えることができる。[4)]

「ディスクール」という用語は「言説」「談話」「言語運用」「演説」と文脈に応じさまざまな訳語が当てられてきたが，その一般的な用法からして，口頭でのコミュニケーションと深い関連をもつことばである[5)]。じじつ，旧カリキュラムは，話しことばの学習に「読むこと」「書くこと」に並ぶ独立した章を設け，従来のカリキュラムから見れば破格ともいえる重要性を与えていた。

このように口頭表現との結びつきの強い用語がカリキュラムの中心概念に

据えられた背景には，文文法を中心とした学習の有効性への批判的な反省がある――

> 文章が組み合わされてテクストとなり，テクストはディスクールとして現実化するので，文法の１項目を学習するには，部分から全体に向かう運動に従って文から出発して，テクストもしくはディスクールの方に向かうのが論理的に見える。
> これは，往々にして全体が部分を規定していることを忘れ，構成要素を学びはしても，それが形成する全体を考慮しないという危険をおかすことに他なるまい。したがって大抵の場合は，ディスクールおよび／あるいはテクストから出発し，段階的に分析分野を絞り込む運動に従って文の方に向かうのが好ましいであろう。[6)]

とはいえ，フランス語は学校教育の一科目である以上，生徒が日々使用しているコミュニケーション・ツールも成績評価の対象であることは免れない。

生徒がすでに使いこなしているコミュニケーション・ツールにかんし，修得すべき知識・技能をいかに定義するか。この問題の困難は，1996 年のカリキュラムの構成自体に直接反映している。なぜなら，各学年ともに「読むこと」「書くこと」「話すこと」という章には通し番号が付されているのに対し，ことばにかんする学習内容をまとめた章にだけは通し番号が付されていないからである。これらの学習内容は「読むこと，書くこと，および口頭での言語実践のためのことばの道具」というというタイトルの下に，各学習期のカリキュラム末尾に列挙されているだけなのである[7)]。このような歪（いびつ）とも言える構成は，ことばの学習の分野で修得すべき知識・技能の選別・階層化，他の学習項目との関連づけが十分に練り上げられなかったかのような印象を与えてしまう。

他方，ディスクールが学習活動の全体を組織・統合する概念として前景化することにより，旧カリキュラムにおける文文法の地位は大きく後退してしまった。この事実は，ことばにかんする学習内容をまとめた章の構成からも明白である。

まず，適応期（第６学級）のカリキュラムでこの章は「I. 目標」「II. 内容」のセクションに分けられ，さらに「内容」のセクションが「ディスクール」「形態統辞」「語彙」「綴り字」の小セクションに区分けされている。従来なら文法という見出しが使われてしかるべき箇所で，あえて「形態統辞」という用語が使用されている。こうして，コレージュ第１学年のカリキュラムでは文法という用

語の使用が慎重に避けられているのである。中央期（第５学級・第４学級）の学習内容は「１．文法」「２．綴り字」「３．語彙」という小セクションによる構成になっている。これは従来通り文法がことばの学習の中心を占めているかのような印象を与える。しかし，文法にかんする小セクション自体がさらに「ディスクール」「テクスト」「文」という項目に細分されており，文文法は限定的な位置に留まっているのである。進路指導期（第３学級）でも同様の傾向が確認できる。ことばの学習にあてられた章は「A. 目標」「B. 語彙」「C. 文法」「D. 綴り字」という構成であり，文法のセクションは中央期と同様の項目分けが踏襲されているからである。

２．ディスクールから文文法へ

旧カリキュラムとは対照的に，新カリキュラムはことばの学習が占めるべき重要性を明快に認めている。これらの学習内容は「ことばの学習」と題された章にまとめられている。章の構成は，各学年ともに「１．文法」「２．綴り字」「３．語彙」というセクションから成っている。さらに「文法」のセクションは「文の分析」「品詞」「動詞の用法」といった小セクションに分けられている。また学習内容の編成は，新カリキュラムではコレージュで伝統的に行われてきた文文法の学習を重視した構成になっている。しかも「ことばの学習」は各学年を通じ第１章として，最も多くのスペースが割かれている。「コレージュではことばを学び，リセでは文学を学ぶ」，これはフランスの中等教育におけるフランス語教育のあり方を形容する際に，しばしば使われてきた表現である。全体の構成を見る限り，新カリキュラムはこの伝統への回帰の舵を切ったと言えよう。

じじつ，カリキュラム前文は，文法の重要性を以下のように訴えている――

> 文法の学習は根本的である。すなわち，文法の学習を通じ，生徒が今後の社会生活において適切に自分の考え表現するために，さらに共通の教養の土台となるテクストを理解し味わうために不可欠な，ことばの現実を認識することが可能となるのである。文法の仕組みを知るには，直観と同じく，分析的な考え方，論理力が必要である。つまり文法の知識は思考の構造化に完全に寄与しているのである。[8)]

しかも，文法の学習では文文法を重視することまでも明言している――「コレージュにおいてカリキュラムは文文法を重視する」[9)]。

新カリキュラムの方向性を考察するうえで，最も興味深いのは「ディスクール」という用語の取り扱いだろう。「ディスクール」が旧カリキュラムの中心的概念であったことはすでに確認した。新カリキュラムでは，この用語は，わずかに間接話法，自由間接話法の意味で使われているのみである。つまり，旧カリキュラムがその前文で定義していた「筆記あるいは口頭でのコミュニケーション行為におけることばの使用全般」という意味ではまったく使用されていないのである。旧カリキュラムを理念的に支えていた概念が見られなくなった。この点にこそ，旧カリキュラムが押し進めてきた口頭のコミュニケーションを概念上の軸に据えた教育を放棄し，コレージュにおけるフランス語教育を異なる視点から構築しようとする新カリキュラムの姿勢を確認できる。

学習項目の配列，記述の仕方を比較してみても，1996 年と 2009 年のカリキュラムでは明白なコントラストが確認できる。旧カリキュラムでは小学校を終えたばかりの第 6 学級から発話行為，テクスト文法にかんする学習項目が多数盛り込まれていた。対照的に新カリキュラムではこうした項目の絞り込みが行われているうえに，生徒・保護者により親しみやすい用語への書換えが施されているのである。しかも学習の時期も 1 学年もしくは 2 学年引き上げられている。一方，品詞，動詞の用法といった学習項目については，さまざまな用法の中でどのポイントを学ぶのかについて，より詳細な指示がなされている。

具体例を示そう。まず，コレージュ第 1 学年である適応期のカリキュラムを例にとろう。旧カリキュラムのことばにかんする章で最初に登場する学習項目は以下のような内容であった――

> 多様で意味のあるコミュニケーションの状況を作り出すことによって，メッセージ，発信者，受信者，さまざまなことばの調子，コミュニケーションの状況を指し示すことばといった〔コミュニケーションの〕基本的概念が明らかになる。[10)]

引用はヤーコブソンによるコミュニケーションの図式をそのまま書き写したような内容である。このようなコミュニケーションの実態の分析にかかわる学習内容は，新カリキュラムでは，コレージュ第 3 学年にあたる第 4 学級になってようやく登場する。しかも，旧カリキュラムで使用されていた発信者・受信者・調子（registre）といった用語はより平易なことばに書き換えられているだけでなく，場合によってはその使用さえもが控えられている――

発話行為の文法へのイニシエーション
・発話行為の状況を明らかにすることと，その構成要素（誰が誰に話すのか，どこで，そしていつ？〈私・ここ・今〉との関係での状況把握）。[11]

また，「ディスクールの組織と一貫性」（第６学級），「発話者の視点」（第４学級）のように，旧カリキュラムでは取り上げられてはいても，新カリキュラムでは触れられていない項目も散見する。

同様の傾向は「論証 argumentation」にかんしても確認できる。旧カリキュラムで論証文はコレージュばかりでなく，リセでも特に重視されていた学習項目であり，コレージュ第１学年からリセまで継続的に学習されることになっていた。じじつ，適応期のカリキュラムでは以下のような学習項目が掲げられている――「同定すべき３つのディスクール：叙述・描写・論証」[12]。一方，新カリキュラムでは論証文の学習はごく基礎的な事項に限定されている。しかも学習年次は２年間も引き上げられている。すなわち，第４学級で「論証にかんする接続詞・句」に触れ，第３学級では「論証にかんする語彙」を学び，さらに作文，口頭表現でそれらを使うよう生徒に促すことが求められている[13]。

この傾向はさらにレトリックにかんする学習内容にも見られる。旧カリキュラムの第５学級ではおもに「比較・暗喩・換喩・迂言法・対句法」といった用語，および「文章が意味を産み出す際にこれらの文彩が果たす役割」について学ぶことになっていた[14]。ところが，新カリキュラムでは同じ第５学級で比較と暗喩のみを学び，また第４学級で誇張法・アイロニーについては学ぶものの[15]，換喩・迂言法・対句法はどの学年でも学習項目としてリストアップされていないのである。

新カリキュラムでは，発話行為，論証文，レトリックにかんする項目は，学習内容を絞り込み，用語を平易にし，学習年次を引き上げる傾向にある。一方，品詞の用法については，多くの項目で旧カリキュラムよりも詳しい記述が施してある。とりわけ動詞の時制や法についてはこの傾向が顕著である。たとえば旧カリキュラムの適応期の「ディスクール」というセクションは，動詞の用法について以下のような項目を掲げるのみで，項目がカバーする分野の何を優先的に教えるべきかについての指示は見られない――

叙述ディスクール，描写ディスクールにおける動詞の時制の意味，おもに現在・半過

去・複合過去・単純過去の意味。[16]

この簡潔な記述とは対照的に，新カリキュラムはそれぞれの時制のどのような意味・用法を学ぶのかにまで立ち入って詳細に言及している。上記の例と同学年にあたる第 6 学級の記述を参照してみよう――

動詞の時制の意味
・時間の中で位置づける：過去 / 現在 / 未来
・現在（一般的真理の現在，現在時の現在，説話的現在）
・単純過去と半過去（物語のなかでの前景と背景；描写の半過去；語りの単純過去；限定された / 限定されていない行為もしくは状況）
・複合過去（使用が広がったのは話しことばで単純過去が使われなくなったから）[17]

第 6 学級に限らず，品詞の意味・用法について，旧カリキュラムよりも格段と詳細な説明が施してある例は枚挙にいとまがない。文法上の説明が丁寧な背景には，何を教えるべきかについてより詳細な情報を教員に提供する意図や，旧カリキュラムとは違って浩瀚な指導書の出版の予定がないといった事情があるのはもちろんだが[18]，旧カリキュラムでは従来のコレージュにはなじみの薄い用語が多すぎたことへの反省があるものと考えられる。統一コレージュの実態に適応してない用語の多用は，現場の教員や文学研究者らが強く非難しただけではない。こうした多用が産み出す弊害について，さまざまな報告書が繰り返し警鐘を鳴らしてきたのである。

国民教育総視学局による『コレージュにおけるフランス語教育』(2002 年）は，新しく導入された概念を説明することに教員の注意が向くあまり，彼らが「担当科目に対してきわめて技術的なヴィジョン」を持つことを問題視した。なぜなら「他者と意思の疎通を図り」,「他者を考慮し」,「言語・文化・社会の一員となる」といった，フランス語が本来担うべき「社会的な最終目標」が多くの教員から軽視されてしまったからである[19]。また，コレージュのカリキュラム再検討委員会が提出した『報告書』(2004 年）では，たとえ旧カリキュラムが生徒の視点に立ったものであろうと，小学校のカリキュラムとの「断絶」が生じていること，また「文法は読むことと書くこととをつなぐきわめて重要な蝶番である」ことを喚起していた[20]。旧カリキュラムに対して最も批判的な論を展開したのは国民教育省からの委託を受けたによるアラン・ベントリラによる『文

法教育にかんする委託報告書』(2006 年) であろう。この報告書は旧カリキュラムの下での文法教育を「専門家のモデルを濫用して見習いに適用してしまった」と厳しく非難している。さらに「文法学習において明確で厳密なカリキュラム編成の回復が必要である」ことを指摘するだけでなく，保護者が子供たちの学習を援助できるように文法用語は「単純，平明かつ正確」であることを強く提言した[21)]。

新カリキュラムでは，学習内容の説明がより詳細になされているだけでなく，進度にかんしても学年ごとの学習内容がより明確に示されている箇所が見られる。じじつ，進度が読みとりづらいのは旧カリキュラムの大きな問題点のひとつであった。先ほども指摘したように，たとえばレトリックにかんする学習内容が，中央期と進路指導期でまったく同じといった極端なケースさえあった。また第 5 学級・第 4 学級をまとめた中央期では，数ある学習内容のなかで何を第 5 学級で学び，何を第 4 学級で学ぶのかの判別がしばしば困難であった。旧カリキュラムの本文中，第 4 学級で学ぶのが適当な内容についてはイタリックで示されることになっていたのだが，その数があまりに限定されていたので，両学年で学ぶ内容の量に大きな不均衡が生じてしまっていたのである。

両カリキュラムのあいだで均衡のとれた進度への配慮の違いがもっとも明瞭に見て取れる学習内容のひとつは接続法である。まず旧カリキュラムを見てみよう。そこでは，接続法は適応期で初めて学習することになっている――

> 使用頻度の高い第 3 群動詞（aller, devoir, dire, falloir, prendre, savoir, valoir, venir, voir, vouloir）の直説法（現在・未来・半過去・単純過去・複合過去・大過去）と命令法，条件法，接続法現在の活用[22)]

これでは，接続法の多様な用法のなかから何をどこまで教えるべきなのか，まったく見当がつかない。しかも，中央期でも接続法については概ね同様の記述が見られる。つまり両者のあいだに学習の進捗を読み取るのはほぼ不可能なのである――「第 1 群，第 2 群動詞，および日常用いられる第 3 群動詞の活用（直説法・接続法・命令法・《条件法》）」[23)]。

他方，新カリキュラムでは接続法は第 5 学級からしか登場しない。しかも進度は各学年で段階的になるように配慮されている。第 5 学級の学習範囲は，接続法現在の活用という最も基本的な用法に留められている――「直説法（現実

世界への書き込み）と接続法（頭のなかでの想像）」[24]。以後は学年が上がるごとにより難解な用法を学ぶべく学習内容が編成されている。たとえば，第4学級では希求法と従属接続詞節中の用法を学ぶ――

・独立節もしくは主節における接続法（願望もしくは祈りの意味，またある種の人々に対しては命令法の代わりとなる）
・que が導入する従属接続詞節中の接続法（願望，意志，あるいは感情の動詞の後で）[25]

そしてコレージュ最終学年の第3学級では接続法過去，譲歩節といったより文語的な用法を学ぶ――

・接続法過去：過去時制の概観。少なくとも3人称半過去の暗記
・関係詞従属節中の接続法
・状況従属節中の接続法（譲歩，条件，否定された理由・目的，avant que のような時を示す従属節）[26]

新カリキュラム前文は文法学習にかんし，進度に念入りに配慮したことを強調している。進度設定についてその妥当性に疑義を抱かせるものがないではないが，接続法のケースは今日の統一コレージュの実態を考慮し，生徒が無理なく段階的に学習できるように配慮された進度の好例のひとつであろう。

まとめ

本稿は2009年新学期から施行されているフランス語カリキュラムにおける「ことばの学習」に的を絞り，旧カリキュラムとの比較を通して，その方向性の素描を試みた。その結果を要約すれば，新カリキュラムは文文法回帰のカリキュラムである，と結論づけることができる。

旧カリキュラムにおけることばの学習は，ディスクール・言表行為・テクスト文法・論証といった，いわばソシュール以降の言語学の知見を中等教育の場に取り入れようとした野心的な試み，と特徴づけることができよう。その後発表されたコレージュにおけるフランス語教育・文法教育にかんする報告書などの内容，そして旧カリキュラムとは180度方向転換した新カリキュラムの方針からして，旧カリキュラムの試みは失敗であったと結論づけざるを得まい。しかし失敗の理由は何であったのか。今日の統一コレージュの制度に起因するの

か。ソシュール以降の言語学の知見を中等教育が受け入れられる形に〈翻訳〉するには，まだ理論的な詰めが十分ではなかったのだろうか。それとも改革を受け入れられないコレージュ教員の保守性のためなのだろうか。おそらく旧カリキュラム失敗の問題は，学校制度のあるべき知の姿を考える上でも今後検証すべき興味深い事例であろう。

現段階で言えることは，ピサに代表される国際学力調査におけるフランスの成績の低迷も手伝って，義務教育課程で生徒が身につけるべき知識・技能の定義にかんする国民的な議論――周知のように，議論は 2006 年 7 月の政令で発表された「共通基礎知識技能」いう形で実を結んだ――を通じ，義務教育における学習のあり方に対し〈古き良き伝統〉への回帰という圧力が近年とみに強く働いている，という事実であろう[27)]。

最後に，新カリキュラムには学習内容ばかりでなく，教授法についても興味深い提言が見られることも指摘しておこう。1980 年代半ばから，コレージュやリセでは文法を，読むこと，書くこと，あるいは話すことから切り離して教えるのではなく，これらすべての分野を関連づけて授業計画を立てること，いわゆるセカンスによる教授法が教員に対して強く推奨されている。しかし新カリキュラムは，文法に限っては他の分野から切りはなして教えることが可能であることを示唆している――「ことばの学習に割り振られた授業は〔…〕他のフランス語教育の構成要素と切り離して実施することができる」[28)]。こういった考え方は中等教育における今後のフランス語教育のあり方に何らかの重要な変更をもたらしうるのだろうか。この問題は，今後新カリキュラム対応の教科書の分析や，現地での聞き取り調査・授業参観を行う際の課題としたい。

註

1）日仏教育学会 2009 年度研究大会（2009 年 10 月 11 日，於・東京理科大学）での個人研究発表「フランス語のコレージュ新カリキュラムについて――旧カリキュラムとの比較」。

2）拙論「母国語の再構築――コレージュ第 6 学年現行フランス語カリキュラムをめぐって」，『日仏教育学会』，12 号（通巻 34 号），2006 年 3 月，57-66 頁を参照。ちなにみ，旧カリキュラムに反対するミシェル・ジャルティが編纂した『文学教育へ

の提言』には，ミシェル・ザンク，アントワーヌ・コンパニオン，アラン・フィンケルクロート，ジャン＝フランソワ・シルネッリ，ドゥニ・カンブーシュネール，レジス・ドゥブレ，パトリック・グランヴィル，ダニエル・サルヌーヴらが反対の立場から，また旧カリキュラム作成にあたった専門家グループの座長アラン・ヴィアラが擁護の立場から論考を寄せている（Michel JARRETY, *Propositions pour les enseignements* littéraires, Paris : PUF, 2000, 190 pp.）。

3）旧カリキュラムの指導書の提唱――「カリキュラムは教員にさらに生徒の視点に入り込み，生徒の言語実践の実態を考慮するように促す」（« Accompagnement du programme de 6e », *Enseigner au collège*, Paris : CNDP, 2005, p. 27）。

4）« Programme du cycle d'adaptation : le français au collège », *ibid.*, p. 14.

5）例えば『リトレ』は「ディスクール」の第一義を「会話，対話中のことば」と記している。

6）« Accompagnement du programme de 6e », *op. cit.*, p. 48.

7）それぞれ，第6学級は「適応期」に，第5学級・第4学級は「中央期」に，そして第3学級は「進路指導期」に相当する。

8）« Programmes du collège : programmes de l'enseignement de français », *Bulletin officiel spécial*, n° 6, 28 août 2008, p. 2.

9）*Idem*.

10）« Programme de la classe de 6e », *Enseigner au collège*, Paris : CNDP, 2005, p. 22.

11）« Programmes du collège : programmes de l'enseignement de français », *op. cit.*, p. 9.

12）« Programme de la classe de 6e », *op. cit.*, p. 22.

13）« Programmes du collège : programmes de l'enseignement de français », *op. cit.*, pp. 13-14.

14）中央期，特に第5学級で学ぶべきこれらの修辞用語にかんする文言は，第3学級カリキュラムの語彙のセクションで再びそのまま使用されている。国民教育総視学局による『コレージュにおけるフランス語教育』にかんする報告書も，旧カリキュラムの問題点のひとつとして，学年あるいは学習期ごとの進度が明確でないことを指摘していた。レトリック用語にかんする箇所は，この指摘が見事に当てはまる（Inspection générale de l'éducation nationale, *L'Enseignement du français au collège*, Paris : Ministère de la jeunesse, de l'éducation nationale et de la recherche, 2002）。

15）ちなみに，旧カリキュラム，および指導書のいずれも誇張法には言及していない。一方，イロニーについては，カリキュラムには言及が見られないものの，指導書は中央期および進路指導期で数度にわたって触れている。

16）« Programme de la classe de 6e », *op. cit.*, p. 22.

17）« Programmes du collège : programmes de l'enseignement de français », *op. cit.*, p. 5.

18）2009年3月にボルドー市で行ったボルドー大学区視学官カトリーヌ・ダルーゼ女史へのインタビュー調査による。

19）Inspection générale de l'éducation nationale, *op. cit.*, pp. 2-3.

20）Groupe de relecture des programmes du collège（Pôle des humanités, sous la présidence de René RÉMOND）, *Rapport*, Paris : Ministère de la jeunesse, de l'éducation nationale et de la recherche, 2004, p. 27.

21）Alain BENTOLILA, *Rapport de mission sur l'enseignement de la grammaire*, 2006, pp. 8 et 33［http://www.education.gouv.fr/cid4767/rapport-de-mission-sur-l-enseignement-de-la-grammaire.html］.

22）« Programme de la classe de 6e », *op. cit.*, p. 22.

23）*Ibid.*, p. 80.

24）« Programmes du collège : programmes de l'enseignement de français », *op. cit.*, p. 8.

25）*Ibid.*, p. 9.

26）*Ibid.*, p. 12.

27）今日のフランスの教育界を覆う懐古趣味・ノスタルジーがはらむ危険については以下を参照―― François DUBET, *Faits d'école*, Paris : Éd. de l'École des Hautes études en Sciences sociales, coll. « Cas de figure », 2009.

28）« Programmes du collège : programmes de l'enseignement de français », *op. cit.*, p. 1.